『禅源諸詮集都序』の訳注研究（七）

石井修道
小川隆

凡例

一、凡例は『駒沢大学仏教学部研究紀要』第五十四号に準ずる。

禅源諸詮集都序目次

〔一〕裴休の序

巻　上（目次省略）

〔二〇〕（以上『紀要』第五十三号）

〔二一〕～〔二五〕（以上『紀要』第五十四号）

〔二六〕～〔二九〕（以上『論集』第二十七号）

〔三〇〕～〔三二〕（以上『紀要』第五十五号）

巻　下

〔三三〕空宗と性宗の十の相違点

〔三四〕法と義の解釈の相違

〔三五〕性と心の相違

〔三六〕性の解釈の相違

〔三七〕智と知の解釈の相違

〔三八〕有我と無我の解釈の相違

〔三九〕真理のあらわし方の相違――消極性と積極性――

〔四〇〕名と体の相違

〔四一〕二諦と三諦の解釈の相違

〔四二〕三性説の解釈の相違

〔四三〕仏徳の有無についての相違

〔四四〕禅の三宗は根本においては一つである（以上『論集』第二十八号）

〔四五〕頓教の二つの意味――逐機の頓と化儀の頓――
〔四六〕頓漸の種々な解釈　（以上今号）
〔四七〕一真心体こそ教法の根源である
〔四八〕仏が経を説いた本意
〔四九〕仏の本意と三種の教
〔五〇〕仏と衆生、悟と迷との関係
〔五一〕迷いの過程――凡夫の相――
〔五二〕悟りへの道
〔五三〕悟りと迷いの体系を図示する理由
〔五四〕悟りと迷いの図式
〔五五〕悟りと迷いの図式によって反省自覚すべきこと
〔五六〕修道の心がまえ
〔五七〕むすび㈠
〔五八〕むすび㈡
〔五九〕後記

〔四五〕頓教の二つの意味―逐機の頓と化儀の頓

（1）問、前云佛說頓教漸教、禪開頓門漸門、未審三種教中、何頓何漸。答、法義深淺、已備盡於三種。但以世尊說時儀式不同、有稱理頓說、有隨機漸說、故復名頓教漸教、非三教外別有頓漸。

（2）漸者爲中下根、即時未能信悟圓妙理者、且說人天、小乘、乃至法相、（上皆第一教也。）破相、（第二教也。）待他根器成熟、方爲說於了義、即法華涅槃等經是也。（此及下逐機頓教、合爲第三教。）其化儀頓、則總攝三般。西域此方古今諸德所判諸教三時五時者、但是漸教一類、不攝華嚴佛頂圓覺金剛三昧

問う、前に仏は頓教と漸教とを説き、禅は頓門と漸門を開くと云えり(1)。未審、三種の教の中において、何れが頓、何れが漸なりや。答う、法義の深浅は、已に備さに三種に尽くせり。但だ世尊の説時と儀式との不同を以て(2)、理に称うの頓説有り(3)、機に随うの漸説有るのみ(4)。故に復た頓教漸教と名づくるも、三教の外に別に頓と漸と有るには非ず。

漸とは中下の根の、即時には未だ円妙の理を信悟(5)すること能わざる者の為に、且らく人天、小乗、乃至、法相〈上は皆な第一教なり〉(6)、破相〈第二教なり〉(7)を説き、他の根器の成熟するを待って、方て為に了義を説く(8)もの、即ち『法華』『涅槃』等の経是れなり。〈此れ及び下の逐機の頓教、合して第三教と為す。其の化儀の頓は則ち総じて三般を摂す(9)。西域と此方の、古今の諸徳の判ぜし所の諸教の三時五時(10)は、但だ是れ漸教の一類たるのみにして、『華厳』『仏頂』『円覚』『金剛三昧』(11)等の経を摂せざるなり〉。

等*經也。

（3）頓者復二、一逐機頓、二化儀頓。逐機者、忽遇凡夫上根利智、直示眞法、聞卽頓悟、全同佛果。如華嚴中、初發心時、卽得阿耨菩提。圓覺中、觀行成時、卽同佛境。大佛頂經、識陰盡時、頓超十地、直入如來妙莊嚴海。然始同前二教中行門、漸除凡習、漸顯聖智。如風激動大海、不能現像、風若頓止、波浪漸停、影像漸顯。（風喩迷情、海喩心性、波浪喩煩惱、卽華嚴一分、及圓覺、佛頂、密嚴、勝鬘、如來藏之類、二十餘部經是。遇機卽說、不定初後、與禪門第三直顯心性宗全相同也。二化儀頓者、謂佛初成道、爲宿世緣熟上根之流、一時頓說性相理事、衆生萬惑、菩薩萬行、賢聖地位、諸佛萬德。因該果海、初心卽得菩提、果徹因源、位滿猶稱菩薩。此唯華嚴一經及十地一論、名爲圓教、餘皆不備。（前叙外難云頓悟成佛是違經者、余今於此通之。）其中所說諸法、是全一心之諸法、一心是全諸法之一心、性相圓融、一多自在。故諸佛與衆生交徹、淨土與穢土融通、法法皆彼此

頓には復た二あり(12)、一には逐機の頓、二には化儀の頓なり。逐機の頓とは、忽ち凡夫の上根利智に遇うや、真法を直示し、聞いては即ち頓悟して、全く仏果に同ずるもの。『華厳』の中にて、初めて発心する時に即ち阿耨菩提を得といい(13)、『円覚』の中にて、観行成ずる時に即ち仏境に同じ(14)、『大仏頂経』に識陰尽くる時、頓に十地を超え、直に如来の妙荘厳海に入る(15)、というが如し。然して(16)始めて前の二教の中の行門と同じく、漸に凡習を除き(17)、漸に聖智を顕わすなり。風、大海を激動すれば、像を現ずること能わざるも、風若し頓に止むときは、波浪漸に停まり、影像漸に顕わるが如し〈風は迷情に喩え、海は心性に喩え、波浪は煩悩に喩え(18)、影は功用に喩う。『起信論』の中にて一一配合せり(19)〉。即ち『華厳』の一分及び『円覚』『仏頂』『密厳』『勝鬘』『如来蔵』(20)の類の二十余部の経是れなり(21)。機に遇うて即ち説くものにして、初後を定めず、禅門の第三直顕心性宗と全く相い同じなり。二の化儀の頓とは、謂く、仏初めて成道して、宿世の縁の熟せる上根の流の為に、一時に頓に性相理事と、衆生の万惑、菩薩の万行、賢聖の地位、諸仏の万徳を説く。因は果海を該ね、初心に即ち菩提を得、果は因源に徹して、位満つるも猶お菩薩と称す(22)。此れは唯だ『華厳』の一経と及び『十地』の一論(23)のみにして、名づけて円教(24)と為し、余には皆な備わらず〈前に外に難じて、頓悟成仏は是れ経に違うと云うを叙せるは(25)、余、今ま此に於て之れを通ずるなり〉。其の中にて説く所の諸法は、是れ全き一心の諸法、一心は是れ全き諸法の一心にして、性と相と円融し、一と多と自在なり。故に諸仏と衆生と交徹し(26)、浄土と穢土と融通し、法法皆な彼此互収し、塵塵悉く世界を包含し、相入相即して、無礙鎔融し、十玄門を具して(27)、重重無尽なり、名づけて無礙法界と為す(28)。

互收、塵塵悉包含世界、相入相即、無礙鎔融、具十玄門、重重無盡、名爲無*礙法界。

＊時＝教（弘）。＊圓＝圓覺（明）。＊人＝前人（弘）（明）。＊他＝其（弘）（明）。＊等經＝經等（弘）。＊〈此〉＝〈比〉（底）。＊〈教〉＝〈教也〉（弘）（明）。＊〈諸〉＝ナシ（弘）（明）。＊〈三〉＝〈爲三〉（弘）（明）。＊〈佛〉＝〈佛〉以下八字ナシ（弘）（明）。＊〈等經也〉＝〈等經〉（弘）＝〈經等〉（明）。＊忽＝ナシ（弘）（明）。＊覺＝覺經（明）。＊成時＝ナシ（弘）。＊同佛境＝成佛道（弘）（明）。＊大＝大以下二十字ナシ（弘）（明）。＊漸＝頓（底）。＊智＝德（弘）（明）。＊止＝息則（弘）（明）。＊漸＝ナシ（弘）。＊顯＝顯也（弘）（明）。＊〈浪〉＝ナシ（弘）（明）。＊是＝是也（弘）（明）。＊者＝ナシ（明）。＊理事＝事理（弘）。＊一＝ナシ（弘）（明）。＊圓＝頓（弘）＝圓頓（明）。＊〈之〉＝〈了也〉（弘）＝〈了〉（明）。＊無＝無障（弘）（明）。

（1）問う、前に「仏は頓教と漸教とを説き、禅は頓門と漸門を開く」とあったが、さて、三種の教（密意依性説相教・密意破相顯性教・顯示真心即性教）のうち、どれが頓で、どれが漸であるのか。答え、法義の深い浅いは、もはや総て先の三種に尽くされている。ただ世尊がそれを説いた〝時〟と説いた法式との違いによって、理にかなった頓の説と、相手の能力に応じた漸の説とが有るのである。それ故、これを頓教と漸教と名づけるが、だが三教の外に別に頓と漸とが有るわけではない。

（2）漸とは、即時に円妙の理を信悟することができない中・下の機根の者の為に、さしあたり（前の）人・天、小乗、さらに法相〈これらは総て第一教〉、破相〈第二教〉の教えを説き、その機根が成熟するのを待って、その上で始めてそれらの人々に了義を説いてやったものである。『法華経』『涅槃経』等の経がそれに当たる〈これと下の逐機の頓教とを合せて第三教とする。化儀の頓はこれら三種をすべて包摂する。インドや中国の古今の先達が教判で説いている三時教とか五時教とかも、ただ漸教という一類のものに過ぎない。そこには『華厳経』『仏頂経』『円覚経』『金剛三昧経』等の経が包摂されていないのである〉。

（3）頓にはさらに二つがある。一つには逐機の頓、二つには化儀の頓である。第一の逐機の頓とはこうだ。もしも凡夫のうち、優れた知慧をもつ上根の者に出逢ったら、その者には真法をズバリと指し示し、その者はそれを聞けばたちどころに頓悟して、仏の果（さとり）と全く同じと成る。『華厳経』に「初めて発心した時、そこで阿耨菩提を得る」とか、『円覚経』に「観行が完成すればそのまま仏の境界に同一である」とか、『大仏頂経』に「六識・六境が尽きる時、頓に十地を飛び越えて、そのまま如来

の妙なる荘厳の海に入る」と言っているのがそれである。その後に始めて前の二教の中の行門と同じく、漸々に凡夫の習気を取り除き、漸々に聖智を顕わしてゆくのである。

たとえば、風が大海を激しく動かせば、そこに像が現ずることはできないけれども、もし風が頓に止めば、波浪は漸々に停まり、影像が漸々に顕われてくる、そのようなものである〈風は迷情に喩え、海は心性に喩え、波浪は煩悩に喩え、影は功用に喩える。『起信論』の中に一つ一つ対配している〉。『華厳』の一部、及び『円覚経』『仏頂経』『密厳経』『勝鬘経』『如来蔵経』などの二十余部の経がこれに当たる。しかるべき根機に遇えばこれを説くのであり、説時の前後を定めないもので、禅門の第三直顕心性宗と全く同じである。

第二の化儀の頓とは、次のようである。仏が成道してすぐの時、前世からの機縁の熟した上根の人々の為に、一気に頓に、性と相、理と事、衆生の万の惑、菩薩の万の修行、賢聖の悟りの境界、諸仏の万の徳性を説いた。そこでは、因が果の海を収めているので、初発心でそのまま菩提が獲得され、また、果が因の源まで通じているので、位が満ちてもなお菩薩と称されるのである。これはただ『華厳』という一つの経と『十地』という一つの論にだけ説かれており、これを「円教」と名づけるのである。その他のものには全く備わっていない〈前に外から「頓悟成仏は経に相違する」と論難されていると述べたことについて、宗密は今ここで解決した〉。その中で説くところの諸法は一心そのものの諸法であり、一心は諸法そのものの一心のことである。そこでは性と相とが完全に融合して、一と多とが無碍自在となる。それ故に諸仏と衆生とが相互に交流し、浄土と穢土とが融通し合い、個々の事物が総て互いに包摂し合い、個々の微塵が悉く世界を包含し、相入し相即して、障礙なく一つに解け合っており、十玄門が備わり、重重無尽（どこまでも限り無い状態）となる、これを「無礙法界」と名づけるのである。

（1）前に仏は……‖六段およびその注(1)(2)を参照。

（2）説時によって法の相違を述べたものに、天台の五時の①華厳時②鹿苑時③方等時④般若時⑤法華涅槃時があり、『法華玄義』巻十下（大正三三―八〇八a）や『天台四教儀』（大正四六―七七五C）に説かれる。宗密は『本序』で「漸に五時の異りを設く」（続蔵巻一四―一〇八左下）と記し、それを『大疏鈔』巻一上（同―二一七左下）において、劉虬の説を承けつつ、有教・空教・中道教・同帰教・常住教の五時説と説く。この場合、下記にあるように、『華厳経』のみが頓教とされ、他は漸教とされる。また、天台では、教え導いた教理内容から四種（化法の四教）を、また教え導びく形式方法から四種（化儀の四教）を説く。化儀の四教の頓・漸・不定・秘密

について、宗密は『円覚経大疏鈔』巻三上（続蔵巻一四―二六〇右下～左上）で次のように言う。「謂く、一、頓教、二、漸教、三、不定教、四、秘密教なり。初教は、即ち『華厳経』に初めて頓説を成ずるが故に。二は即ち始め鹿苑より終り双樹に至るまで、三乗と一乗と並な称して漸と為すなり。若し化法に約せば、頓教は二を摂す。謂く、同及び別なり。漸教は四を具す。謂く、蔵・通・別・円なり。然して初めの頓と漸との二教は、本と是れ劉虬の立つる所にして、南中の諸師の不定を加うるを以て、添えて三教を成すなり。後に不定と秘密の二教は、即ち前の不定教中に於いて開出し、前の不定と同ぜざるなり。謂く、此は一音の解を異にする中より、分かちて此の二を成すなり。『浄名』に云く、仏は一音を以て法を演説するに、衆生は各々解する所に随いて、普く受行を得て其の利を獲る。斯れ則ち神力の不共法なり、と。釈して曰く、若し互いに相い知るを、名づけて不定と為す。謂く、各々聞きて同じからず、即ち説く所は不定なり。謂く、大を聞く者は、彼の小を聞くを知り、小を聞く者は彼の大を聞くを知る、故に不定と名づく。故に注に互いに知ると云うなり。若し互いに知らざれば、即ち秘密と名づく。故に注に互に知らずと云うなり。謂く、若し大乗を聞く者は、彼の人の小を聞くを知らざれば、小は即ち大を聞く者に於て秘密と為し、小を聞いて彼の大を聞くを知らざれば、大は即ち小を聞く者に於て秘密と為す。此の二教の説く所の化法は、倶に蔵・通・別・円に通ずる故に、頓の中には唯だ二のみ化法にして、余の三は四の教法を具す。是の故に化儀を以て取らば、『華厳』の円は是れ頓中の円にして、『法華』の円は是れ漸中の円なり。漸頓の儀は、二経則ち異なるなり。円教の化法は、二経殊ならざるなり。（智者）大師の本意は、教を判ずること是の如し。又た円教と詺づけ、亦た名づけて頓と為す。故に円頓止観と云うは此れに由る。所謂る華厳を名づけて頓頓と為し、『法華』を名づけて頓漸と為す。是れ頓儀中の円頓と漸儀中の円頓なるを以ての故に」。

（3）理に称うの頓説＝理に称うについて、『円覚経大疏』巻上一（同―一一五左下～一一六右上）に、法蔵の小・始・終・頓・円の五教判のうちの、終教と頓教を説いて次のように言う。「三、終教は、亦た実教と名づく。定性の二乗と無性の闡提は、悉く当に成仏して、方めて大乗至極の説を尽くし、故に立てて終と為し、実理に称うを以て、故に名づけて実と為す。少しく法相を説き、多く法性を説く。説く所の法相も亦た会して性に帰す。故に諍論無し。上の二教は並な地位に依りて漸次に修成す、総じて名づけて漸と為す。四、頓教とは、但だ一念すら生ぜざるを即ち名づけて仏と為す。地位、漸次に依りて説かず、故に立てて頓と為す〈『思益』に云く、諸法の正性を得るは、一地より一地に至るにあらず、と。『楞伽』に云く、初地は即ち八と為り、乃至、所有無し、何の次あらん、と〉。総じて法相を説かず、唯だ真性のみを弁ず。一切の所有は唯だ是れ妄想なるのみ、一切の法界は唯だ是れ絶言なるのみ。（以下略）」。この文につづく大乗教の三宗については、三三段の注（4）参照。

（4）機に随うの漸説＝法蔵の五教判の小乗教について、その教を立つる意を明かして、『略疏鈔』巻三（続蔵巻一五―一一八右上）に次のように言う。「機に随うを以ての故に等と言うは、且く仏の此の教を設くるの意を明かす。凡夫と外道とは邪正分かたず、真妄混濫するを以て、仏、若し了義を説いて、一切皆真と云わば、即ち此等は何に因りて心を改め過を悔いん。故に諸法の染浄を説いて、定んで善悪の雲泥なるを別かち、善浄は欣うべし、悪染は厭うべしと知らしめ、彼の賢聖の勝妙を知り、自ら凡夫の過患を覚り、発心して志

を立て、因を修して果を証するが故に機に随う等と云うなり」。修因証果が漸説であり、その説はこの小乗教のみならず、大乗始教にもあり、終教も漸説を含む。それについては、六段およびその注(1)と二五段およびその注(1)を参照。

(5) 円妙の理＝明蔵本は円覚妙理に作る。理については、『円覚経』に「或は衆生有りて、未だ得ざるに得ると謂い、未だ証らざるを証ると謂う」(大正一七―九二〇a)とあるのを、『大疏鈔』巻一二下に「疏に得とは是れ理なりとは、即ち涅槃なり。智とは証なり、理を証るが故に」(続蔵巻一五―一一左下)と釈す。

(6) 人天、……＝二五段およびその注(2)(4)(30)を参照。

(7) 破相……＝二七段およびその注(1)を参照。

(8) 了義＝一四段および九段の注(6)参照。

(9) 三般＝鎌田本は(1)実相般若、(2)観照般若、(3)方便般若の三般若とするが、ここでは第一・第二・第三の三種の教とすべきであろう。

(10) 三時五時＝五時教判については、注(2)参照。中国の三教判は、『大疏』巻上一(続蔵巻一四―一一二左上下)に、頓・漸・不定を述べ、漸教中の三時教として武(虎)丘山岌法師の説を次のようにあげる。「一、有相教〈十二年前〉、二、無相教〈斉より『法華』に至る〉、三、常住教〈最後に『涅槃』なり。此れと唐の三蔵の三教とは、大かた同じ。西域を叙ぶる中に至りて説く〉」。さらにインドの戒賢と智光の説が述べられるが、それらの説は二七段の注(1)に引用す。そこにも注記したように、宗密の説は、元来、澄観の『華厳経疏』巻一(大正三五―五〇八c以下)を承けている。

(11) 『仏頂』……＝底本以外には、『仏頂』以下の三経名はない。

(12) 頓とは復た二……＝以下、四六段の前まで、『宗鏡録』巻三六(大正四八―六二七ab)に引用される。『大疏鈔』巻一下(前掲書―二一八右下)にも、二種の頓を説く。「頓とは二有り。一は化儀の頓なり。謂く、『華厳経』に初めて成仏する時、性に称って一時に頓に理事、本末、始終、因果、理を窮め性を尽すと説くが故に。二は逐機の頓なり。謂く、上根の具足の凡夫に対して頓に絶対中道の真性を指す。『法華』『涅槃』の類の三の破すべき有り、権有りて会すべきと同じからず。但だ一真顕性のみを顕す。即ち『勝鬘』『密厳』『金剛三昧』『如来蔵』『普光明蔵』『円覚』等の四十余部は、文中に皆な少しく事縁を説く。三車の除糞化城等の由縁の会すべき無し。故に此の経は、是れ頓の流類と指すなり。此れは是れ逐機頭体の頓にして化儀の頓に非ず。既に漸次の教に非ず、故に三時五時に属せず」。同文は、『略疏鈔』巻二(前掲書―一〇二右上)にもあり。

(13) 『華厳』の中に……＝『八十華厳経』梵行品に「初めて発心する時、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得」(大正一〇―八九a)とあるによる。後注(22)参照。

(14) 『円覚』の中に……＝『円覚経』にそのままの文はない。『大疏』の科文によれば、頓信解を文殊章で明かし、つづいて漸修証のうちで修証の用心を初めに普賢章で明かし、修証の行相を後に普眼章から明かしはじめるという。行相を明かすのに九問答があって、その初めの問答は上根の修証を明かすが、普眼章こそ「観門は仏と同じくするを開示する」(前掲書―一四一右上)ものだという。四六段

の注（21）参照。

（15）『大仏頂経』……＝この文は底本のみに存す。『首楞厳経』巻十に「識陰若し尽くれば、則ち汝の現前する諸根は互用す。互用中より能く菩薩の金剛の乾慧に入り、円明の精心は中に於て発化す。浄瑠璃内に宝月を含むが如し。是の如く乃ち十信十住十行十廻向の四加行心、菩薩の行ずる所の金剛十地を超え、等覚円明にして如来の妙荘厳海に入る」（大正一九―一五四ｂ）による。

（16）然して始めて＝入矢所持本に、然始＝然後とある。項楚『王梵志詩校注』三四〇頁〔六〕、参照。上海古籍出版社、一九九一年。

（17）漸に＝底本は頓に作るも、他本により漸に改め、後文の喩説に合わせる

（18）『起信論』……＝『起信論』に「一切の心識の相は皆是れ無明にして、無明の相は覚性を離れざるを以て、壊すべきに非ず、壊すべからざるに非ず、（なお）大海の水の風に因りて波動するとき、水相と風相とは相捨離せざるも、而も水は動性に非ざれば、若し風にして止滅するときは、動相は則ち滅して、湿性は壊せざるが如く、是の如く、衆生の自性清浄性も無明の風に因りて動ずるとき、心と無明とは倶に形相無くして、相捨離せざるも、而も心は動性に非ざれば、若し無明にして滅するときは、相続は則ち滅して、智性は壊せざるが故なり」（岩波文庫本三三頁）とあるによる。

（19）『華厳』の一分＝『華厳経』は後に化儀の頓に配し、逐機の頓についてはその一部分とする。宗密が『華厳経』よりも『円覚経』によって頓悟漸修説を主張するのも、このことと関わる。

（20）『如来蔵』＝二九段の顕示真心即性教の中にも出る経典名で、仏陀跋陀羅訳の『大方等如来蔵経』一巻と不空訳の『大方広如来蔵経』一巻がある。

（21）二十余部……＝二九段および前注（12）を参照すれば、四十余部と解してよいか。それらを参考にすれば、ここにかかげる経典の外に『法華経』『涅槃経』『金剛三昧経』があり、『略疏鈔』も同名。『普光明蔵経』については不明。

（22）仏初め……＝澄観の『華厳経疏』の序文の「果に徹し因を該ぬ」を、『演義鈔』巻一（大正三六―三ｂ）で次のように言うのを踏まえる。「徹果該因と言うは、深と広とを兼ぬ。五周の果を徹究すれば、六位の因を該羅するは、則ち広なり。故に広く地位因果を説く。此の経に踰ゆる莫し。若し因は果海を該ね、果は因源に徹し、二は互いに交徹すと云わば、則ち深を顕わすなり。初めて発心する時、便ち正覚を成ずとは、因は果を該ぬるなり。仏道を得ると雖も、因門を捨てず、果は因を徹するなり。上は広義に約す。徹果は果に属し、該因は因に属す。即ち能詮の教の彼の因果を該徹するを明かすなり。今ま深に約して徹果属因を釈すは、因の彼の果を徹するを以ての故に。該因属果は、果の彼の因を徹するを以ての故に。即ち因果の自相なり。該徹は唯だ所詮に属するのみにして、而も其の能詮は、具に斯の義を明かす。然して因は果海を該ね、果は因源に徹すとは、是れ古人の言なり。今ま具に深広の義を含めて、徹果該因と云うのみ」。また同書巻七三（同―五八〇ａ）に「因該果海、果徹因源」を釈して次のように言う。「何以に極果は始信に由り、信は本智に依りて起こるや。今ま本智を離れざるが故に。斯れ則ち因を以て果を成し、果を摂めて因に酬ゆ。然るに因に二種有り。一に本有に約す。恒沙の性徳は、信解行願等を具せざること無きが故に。二に修起に約す。謂く、本信の徳に依りて信心を起こす。本解の徳に

依りて解心を起こす。『起信』に云うが如し。法性は慳貪無しと知るを以ての故に、随順して檀波羅蜜を修行する、等の故に、と、一一修起するに皆な本有を帯して倶に来りて果を至す。無間道中に一時に頓円し、解脱道中に因果交徹するを、名づけて得果と為す。果にも亦た二有り。一は本有なり。菩提涅槃は、一切仏法本覚もて具するが故に。二は修起なり。今ま菩提を証るは始覚もて悟るが故に。始覚は同じく本より復た始本の異り無きを究竟覚と名づく。則ち二果無礙なり。然れば二因は本より本覚体上より起き来たり、則ち二因と本覚とは無礙なり。始覚は既に本覚と同じなれば、則ち二果は全く二因に同じ、則ち二因は果と交徹するが故に。因は果海を該ね、果は因源に徹す」。なお、この文は、前の『華厳経』の梵行品の文と合わせて、『宗鏡鏡』巻三四（大正四八―六一三b）に引用される。宗密の著では、『大疏鈔』巻三上（前掲書―二六三左上）と『略疏鈔』巻四（前掲書一二四左下）に五教判の円教として簡単に説明する。

(23) 『十地』の一論＝世親による『十地経』の注釈書で、仏陀扇多・勒那摩提の共訳になる『十地経論』のことである。二九段に五十（あるいは十五）部の論の一つに記載される。

(24) 円教＝法蔵の五教判について、宗密は『大疏』巻上一（前掲書―一一六右上）で次のように説く。「五、円教とは、一位即一切位、一切位即一位を明かす。是の故に十信満心すれば、即ち五位を摂して正覚を成ずる等。主伴具足するが故に円教と名づく。即ち『華厳経』なり。（以下略）」。ここには『十地論』について言及していない。『略疏』巻上一（前掲書―六〇右下）にも同文あり。なお、この文を注釈したのが、前注（22）所引の『大疏鈔』と『略疏鈔』である。

(25) 前に外に難じて……＝一六段をさす。

(26) 諸仏と衆生……＝澄観の本序の「真妄交徹し、凡心に即して仏心を見る」を、『演義鈔』巻一（大正三六―八a～九a）に詳しく釈す。その中に「真とは謂く、理なり、仏なり、妄とは謂く、惑なり、生なり」とある。

(27) 十玄門を具し＝宗密は、澄観も継承した法蔵の『探玄記』巻一（大正三五―一二三ab）の新十玄を主張する。新十玄とは、(1)同時具足相応門、(2)広狭自在無礙門、(3)一多相容不同門、(4)諸法相即自在門、(5)隠密顕了倶成門、(6)微細相容安立門、(7)因陀羅網法界門、(8)託事顕法生解門、(9)十玄隔法異成門、(10)主伴円明具徳門をいう。澄観は『演義鈔』巻十（大正三六―七五b以下）に詳説す。新十玄門の成立過程については、鎌田茂雄『中国華厳思想史の研究』（東京大学出版会、一九六五年三月）五三七頁以下参照。

(28) 無礙法界＝底本以外は無障礙法界に作る。注（24）につづいて、宗密は円教につき、『大疏』で次のように言う。「説く所は唯だ是れ無尽法界にして、性海円融し、縁起無礙なり。帝網の珠の重重無尽なるが如し。然るに此に判ずる所は、理尽き義周きが故に、清涼大師、用て準的と為す。今ま亦た之れに依るなり。（以下略）」。

〔四六〕 頓漸の種々な解釈

(1) 此上頓漸、皆以*就佛約教而說。若一　此の上の頓漸は(1)、皆な仏に就き教に約するを以て説きたり。若し人に就き悟修

就人約悟修說者、意又不同。如前所叙諸家、有云先因漸修功成、而豁然頓悟、如人伐木、片片漸斫、一時頓倒。亦如遠詣都城、步步漸行、一日頓到。有云因頓修而漸悟、如人學射、頓者箭箭直注意在的、漸者日久方始漸親漸中。此說運心頓修、不言功行頓畢也。有云漸修漸悟、如登九層之臺、足履漸高、所見漸遠。故有人云、欲窮千里目、更上一層樓。等者、皆說證悟也。有云先須頓悟、方可漸修者、此約解悟也。約斷障說、如日頓出、霜露漸消。約成德說、如孩子生、即頓具四肢六根、長則漸成志氣功用。故華嚴經說、初發心時即成正覺。然後三賢十聖、次第修證。若未悟而修、非眞修也。良以非眞修之行、無以稱眞、何有修眞之行不從眞起。故彼經說、若未聞此法、縱多劫修六度行、竟不證眞道。有云頓悟頓修者、此說上上根性根勝故悟。樂欲欲勝故修。俱勝、一聞千悟、得大總持、一念不生、前後際斷。斷障如斬一綟絲、萬條頓斷。修德如染一綟絲、萬條頓色。荷澤云、見無念體、不逐物生。又云、一念與本性相應、八萬波羅蜜門一時齊用。此人三業唯獨自明了、餘人所不見。金剛三昧經云、空心不動、具六波羅蜜。法華云、父母所生眼、徹見三千界。且就事迹而言之、如牛頭融大師之類也。此門有二意。若因悟而修是解悟、

に約して説かば、意は又た同じからず。前に叙せし所の諸家(2)の如きは、有るが云く、先に漸修し功成るに因りて、而して豁然として頓悟すと、人の木を伐るに、片片漸に斫りて、一時に頓に倒るるが如く、亦た遠く都城に詣るに、歩歩漸に行きて、一日、頓に到るが如し(3)、有るが云く、頓修に因りて而して漸悟すと、人の射を学ぶが如し。頓なる者は箭箭直に意を注いで的に在り、漸なる者は日久しくして方始て漸に親しく漸に中るが如し。此れは運心の頓修を説く、功行(4)の頓に畢るを言うにはあらざるなり、有るが云く、漸修して漸悟すと、九層の台に登るに、足履漸に高くして、所見漸に遠きが如し。故に有る人の云く、「千里の目を窮めんと欲して、更に上る(5)一層の楼」と等は、皆な証悟を説くなり(6)。有るが云く、先ず須らく頓悟して、方て漸修す可しとは、此れ解悟に約するなり、断障に約して説かば、日の頓に出でて、霜露の漸に消ゆるが如し。成徳に約して説かば、孩子の生るるや、即ち頓に四肢六根を具し、長じて則ち漸に志気功用を成ずるが如し(7)。故に『華厳経』に説く、「初めて発心する時、即ち正覚を成ず」と。然して後に三賢十聖、次第に修証す(8)。若し未だ悟らずして而も修せば、真の修に非ざるなり。良に以れば、真修の行に非ずんば、以て真に称うこと無し、何ぞ真を修する行の真より起らざるもの有らんや。故に彼の経に説く、「若し未だ此の法を聞かずんば、縦い多劫に六度行を修せんも、竟に真道を証せざるなり(9)」と。有るが云く、頓悟し頓修すとは、此れ上上の根性、根の勝るが故に悟る と楽欲、欲の勝るが故に修す と倶に勝れ、一聞千悟にして、大総持を得、一念不生にして、前後際断するを説くなり、断障は一綟の糸を斬れば、万条頓に断ずるが如く、修徳は一綟の糸を染むれば、万条頓に色づくが如し(10)。荷沢云く、「無念の体を見れば、物を逐うて生ぜず(11)」と。又た云く、「一念と本性と相応すれば、八万の波羅蜜門、一時に用を斉しうするなり」と(12)。此の人の三業は唯だ独り自ら明了にして、余人に見えざる所なり、『金剛三昧経』

因修而悟是證悟。然上皆只約今生而論。若遠推宿世、則唯漸無頓。今見頓者、已是多生漸熏而發現也。有云法無頓漸、頓漸在機者、誠哉、此理。固不在言、本只論機、誰言法體。

（2）頓漸義意、有此多門、門門有意、非强穿鑿。況楞伽四漸四頓、義與漸修頓悟相類。此猶不敢煩云。比見時輩論者、但有頓漸之言、都不分析、就教有化儀之頓漸、應機之頓漸、就人有教授方便之頓漸、根性悟入之頓漸、發意修行之頓漸。於中唯云先頓悟後漸修、似違返也。欲絕疑者、豈不見日光頓出、霜露漸銷、孩子頓生、六根已具。志氣漸立、肌膚人貌業藝皆漸成也。猛風頓息、波浪漸停、明良頓成、禮樂漸學。如高貴子孫少小時遇荒亂沒落爲奴、省事以來、自不知身貴、時清道泰父母論得、當日全身便是貴人、行迹去就不可頓改、故須漸學。是知頓漸之義、其爲要矣。

に云く、「空心は不動にして、六波羅蜜を具す」と。(13)『法華』にも「父母所生の眼は三千界を徹見す」(14)と云うなり〉。且らく事迹に就いて之れを言わば、牛頭融大師(15)の如き類なり。此の門に二意有り(16)。若し悟に因って修せば是れ解悟(17)、修に因って悟らば是れ証悟なり(18)。然るに上は皆な只だ今生に約して論ぜしのみ。若し遠く宿世を推すときは、則ち唯だ漸のみにして頓無し。今ま頓と見ゆる者は、已に是れ多生に漸に熏じて而して発現せるなり。有るが云く、法に頓漸無し、頓漸は機に在り(19)とは、誠なる哉、此の理。固より言に在らず、本と只だ機を論ずるのみ、誰か法体を言わんや。

頓漸の義意に、此の多門有り、門門に意有り、強いて穿鑿するに非ず。況んや『楞伽』の四漸四頓をや〈義は漸修頓悟と相類するなり(20)〉。此れ猶お敢て煩く云わず。比ごろ時輩の論者を見るに、但だ頓漸の言有るのみにして、都べて教に就いて化儀の頓漸と応機の頓漸と有り、人に就いて教授方便の頓漸と根性悟入の頓漸と発意修行の頓漸と有るを分析せず。中に於いて唯だ先に頓悟し後に漸修すと云うのみなるは(21)、違返せるに似たり。疑を絶たんと欲せば、豈に見ずや、日光頓に出でて、霜露漸に銷え、孩子頓に生じて〈六根已に具す〉、志気漸に立ち〈肌膚、人貌、業芸、皆な漸に成るなり〉、猛風頓に息みて、波浪漸に停み(23)、明良頓に成じて、礼楽漸に学ぶことを(24)〈高貴の子孫の少小の時、荒乱に遇いて没落して奴と為り、省事より以来、自ら身の貴なるを知らず、時清ぎて道泰きにして父母論得すれば、当日全身便ち是れ貴人なるも、行迹去就は、頓には改むるべからず、故に須らく漸に学すべきが如きなり(25)〉。是に知る、頓漸の義の、其れ要たることを(26)。

＊以＝ナシ（弘）（明）。＊人＝機（弘）（明）。＊說者＝者說（底）。＊〈如〉＝〈猶如〉（明）。＊〈人〉＝ナシ（弘）（明）。＊〈到〉＝〈倒也〉（弘）＝〈到也〉（明）。＊〈在〉＝〈在於〉（弘）＝〈在中〉（明）。＊〈日〉＝〈久〉（弘）。＊〈也〉＝ナシ（明）。＊云＝云因（明）。＊修＝修而（明）。＊〈云〉＝〈詩云〉（弘）。＊〈層〉＝〈重〉（弘）。＊〈樓〉＝〈樓也〉（弘）。＊悟＝言（弘）。＊〈頓〉＝ナシ（底）。＊〈用〉＝〈用也〉（弘）＝〈業〉（明）。＊經＝ナシ（弘）（明）。＊〈修〉＝〈流〉（弘）（明）。＊〈聞〉＝〈聞說〉（明）。＊〈縱〉＝ナシ（弘）（明）。＊〈行〉＝〈萬行〉（弘）。＊〈竟〉＝〈畢竟〉（明）。＊〈證〉＝〈能證〉（明）。＊〈道〉＝〈也〉（弘）（明）。＊根＝智根（弘）（明）。＊性＝性以下十三字ヲ性樂欲俱勝〈根勝故悟欲勝故修〉ニ作ル（明）。＊〈色〉＝〈色也〉（明）。＊〈應八萬〉＝〈應便具河沙功德八萬四千〉（明）＊〈門〉＝〈行〉（弘）。＊〈用〉＝〈用也〉（弘）（明）。＊見＝及（弘）。＊〈經〉＝ナシ（弘）。＊〈六〉＝ナシ（弘）。＊〈云〉＝〈說〉（弘）＝〈亦說〉（明）。＊〈眼〉＝〈眼□〉（弘）＝〈眼耳〉（明）。＊〈界〉＝〈界等也〉（弘）（明）。＊迹＝跡（弘）（明）。＊門＝二門（底）。＊是＝卽是（弘）（明）。＊因＝若因（弘）（明）。＊是＝卽是（弘）（明）。＊只＝秖（弘）。＊見頓＝頓見（明）。＊此＝之（底）。＊只＝秖（弘）。＊〈强〉＝〈强生〉（弘）。＊〈類〉＝〈類〉（弘）。＊煩＝繁（弘）（明）。＊返＝反（弘）（明）。＊〈銷〉＝消（弘）（明）。＊〈六〉＝〈四肢六〉（弘）（明）。＊〈已〉＝〈卽〉（弘）（明）。＊〈人貞〉＝〈八物〉（弘）＝〈人物〉（明）。＊〈漸〉＝〈漸漸〉（弘）。＊明＝訴（底）（弘）。＊〈少〉＝〈於〉（明）。＊〈遇荒〉＝ナシ（弘）（明）。＊〈省事以〉＝〈生〉（弘）（明）。＊〈身〉＝ナシ（弘）（明）。＊〈道泰〉＝ナシ（弘）（明）。＊〈論〉＝〈訪〉（明）。＊〈便〉＝ナシ（弘）（明）。＊〈行〉＝〈而行〉（弘）（明）。＊〈迹〉＝〈跡〉（明）。＊〈學〉＝〈學也〉（弘）。＊其＝甚（明）。

（1）上段の頓と漸とは、総て仏と教を基準として説いたものである。もし人の機根やその悟修を基準とするならば、その内容もまた別のものとなる。前に述べた諸家の中で、ある者は次ぎのように云う。先ず「漸修」の効果が成就し、その上で突如「頓悟」するのだ、と〈人が木を伐るようなものだ。一片一片を漸に斫っていって、その結果、一気に頓に木が倒れる。また、遠く都に行くようなものだ。一歩一歩、漸に歩いていって、ある日頓に到るのだ〉。

またある者が云う。「頓修」によって、その後に「漸悟」するのだ、と〈人が弓矢を学ぶのと同様だ。頓とは、一箭ごとにズバリ的に意識を集中すること、漸とは、日数が経過して始めて漸に近づき漸に命中するようになることである。これは心の用い方が「頓修」だと言っているのであって、訓練が頓に畢ると言っているのではない〉。

またある者が云う。「漸修」して「漸悟」するのだ、と〈九層の高楼に登るようなものだ。足もとが漸に高くなるにつれて、見えるものも漸に遠くまで及ぶようになる。それ故にある人が「千里の目を窮めんと欲して、更に上る一層の楼」と言っている〉。これらの説は、すべて「証悟」を説いたものである。

またある者が云う。先ず「頓悟」せねばならない、その上で始めて「漸修」することができる、と。この説は「解悟」に配当される〈断障（障礙を断ち切ること）を基準として説くならば、太陽が頓に出て、霜や露が漸に消えていくようなものである。成徳（功徳を成就すること）を基準として説くならば、赤子が生れるや、そのまま頓に四肢六根が備わり、成長してそこで漸に志気や働きが達成されていくようなものである〉。それ故に『華厳経』では「初めて発心する時そのまま正覚を達成する」といい、その上で三賢十聖の位を次第に修証してゆくようになっているのである。もしも悟らぬままに修行するならば、真の修行にはならないのである〈よく考えてみれば、真の修行でなければ、真に称うことは無い。どうして真から起こらない真の修行がありえようか。それ故にかの経に「もしいまだこの法を聞かざれば、たとい無限の時間をかけて六度万行を修行したとて、畢竟、真の道を証ることはない」と説いているのである〉。

またある者が云う。「頓悟」して「頓修」するのだ、と。この説は上上の根性〈機根が勝れているから悟る〉と、楽欲〈求道の意欲が勝れているから修行する〉と倶に勝れた者が、一たび聞いて千を悟り、偉大な総持（教法を保持する能力）を得、一念が生ぜぬことによって、前後際を断絶することを言うのである〈断障は一縷の糸を斬れば、一万の条が頓に断ち切られるようなものである。修徳は一縷の糸を染めれば、一万の条が頓に色に染まるようなものである。荷沢神会は「無念の体を見れば、（念が）物を逐うて生ずることはない」とか、「一念と本性とが相応すれば、八万の波羅蜜門も一斉に用く」と言っている〉。この人の三業はただ独り自ずから明了なるのみで、余人には見えぬものである〈『金剛三昧経』に「空の心は不動であって、六波羅蜜を備えている」と言っている。『法華経』も「父母にもらった眼は三千界を徹底して見通す」と説いている〉。さしあたり事例に即して言うならば、牛頭法融大師のような人々である。この門に二つの意が存在する。悟りによって修行するならば解悟であり、修行によって悟るならば証悟である。だが、以上は総てただ今生について論じたものでしかない。もし遠く過去世にさかのぼるならば、ただ漸があるのみであって、頓は無いのである。今、頓と見えるものも、已に多くの生の繰り返しの中で漸に熏習してきたものの発現に外ならない。またある者が云う。法に頓漸があるのではない、頓漸は機に在るのだ、と。この理は誠に最もなことではないか。もともと言葉にかかわり無く、本来ただ機根を論ずるのみである。誰が法の体のことなど言うであろうか。

（2）頓漸の意味内容としては、以上の多くの門が有り、その一門一門にそれなりの意図があって、しいて牽強付会したものではない。まして『楞伽経』に四漸四頓が説かれているのであるから〈内容は漸修頓悟と相互に類似するものである〉、ここに敢て一々細かく云うことはない。近ごろ一代の名のある論者を見てみると、ただ頓漸の言葉が有るだけで全く分析していない。

だが、教においては化儀の頓漸と応機の頓漸とが有り、人においては教授方便の頓漸と根性悟入の頓漸と発意修行の頓漸とが有るのである。その中で、ただ先に頓悟して後に漸修するということだけを説くのは、相違しているようみえる。しかし、その疑いを絶ち切ろうとするならば、次ぎの事例を見られたい。すなわち、太陽の光は頓に出るが、霜と露が消えるのは漸々にである。また赤子は頓に生まれるが〈六根は備わっている〉、志気ができあがるのは漸々である〈肌や姿形や学問・技芸は、総て漸々に成就するものである〉。また猛風は頓に息むが、波浪がおさまるのは漸々である。また聡明な力は頓に成立するが、礼楽を学ぶのは漸々である、と〈たとえば高貴の人の子孫が、幼い時に荒廃・動乱に遭遇し没落して奴隷と為り、物ごころついてからも自らの尊さを知らずにいるようなものである。だが彼も世道が平静となって父母が語り得れば、その当日に全身がそのまま貴人である。しかし、その立ち居振る舞いは、頓に改めることはできないので、それ故に漸々に学んでゆかねばならない〉。このことから頓と漸の意味、それが極めて肝要であることが判るであろう。

（1）　此の上の頓漸…前段の注（12）に記したように、この段の前半は、『宗鏡録』巻三六に引用される。

（2）　前に叙せし……＝一九段をさす。一九段の注（1）も参照されたい。一九段では、頓漸悟修は、有る説として①漸修頓悟、②頓悟漸修、③頓修漸悟、④漸修漸悟、⑤頓修頓悟（頓悟頓修）、⑥法無頓漸、頓漸在機の六つにまとめられ、この段も基本的にはその説を踏まえるが、一九段の注（1）に示すように、『大疏』巻上（続蔵巻一四―一一九左上下）や『大疏鈔』巻三下（同―二八〇右下以下）においては、さらに「悟に解悟と証悟有り」として、悟を二分する。解悟と証悟については、澄観の『行願品疏』巻二（続蔵巻七―二五二右上）に「若し悟りの相を明かさば、二種を出でず。一は解悟にして、謂く、明らかに性と相とを了（さと）る。二は証悟にして、謂く、心は玄極に造（いた）る」とある。この段が一九段の順序と異って解悟の頓悟漸修を第四に説くのも、この悟の二分類とかかわってくる。因みに『大疏』巻上二と『大疏鈔』巻三下は、悟の二分類を導入して、頓漸悟修を九対に分類する。以下の注の意味を理解しやすくするために預め九対を示すと、（一）頓悟漸修、（二）漸修頓悟、（三）頓修漸悟、（四）漸修漸悟、頓悟頓修を三義に分けて（五）先悟後修、（六）先修後悟、（七）修悟一時、（八）本具一切仏徳為悟、一念万行為修、（九）『楞伽経』中の四漸四頓となる。この九対と解悟と証悟の関係は、『大疏鈔』に「一と五とは解悟、二・三・四・六・九は証悟、七と八とは二悟に通ず」（同）とある。この段で言及しないのは、頓悟頓修説の第三義の（七）と（八）であり、（七）は後注の（18）に取り上げるので参照されたい。ここでは参考として（八）のみを先に記す。『大疏』巻上二（同）の「若し本より一切の仏徳を具すを悟と為し〈大海を飲むが如し〉、一念万行を修と為す〈百川の味を得る〉。亦た解と証とに通ず」を、『大疏鈔』巻三下（同―二八一右上）に次のように釈す。「疏に若本具とある下は、第八の一対なり。結びて解と証とに通ずと云うなり。亦た二意を含むは次上に説くが如し。初義は知るべし、後義は応に釈すべし。解に約して釈せば、但だ無漏の本覚を取りて悟と為し、覚了の心を加えず、但だ性上の功徳を取りて行と為し、息心を待ちて行と為さず。注の

中の飲の字、得の字は皆な喩にして、之れと相応す。証に約して釈せば、即ち始覚の本と合する時、別の始覚の異り無きが故に。『華厳疏』に云く、新たに旧仏と成り、旧仏新たに成る。成る時、但だ是れ本本の真にして、新新の相を見ず。悟と修と皆な爾り、と。故に『華厳』に成仏を説く時、必ず一切衆生と同体倶に成ず。又た云く、成と不成と差別無しとは、正しく新成の虚相を取らざるに由るなり」。

(3) 先に漸修……＝漸修頓悟説。一九段の注(1)や前注にも指摘するように、この説を含めて、以下の宗密の頓漸悟修の分類は、澄観の説に基づくものであり、ここも、『行願品疏』巻二(続蔵巻七―二五二右上～左下)や『演義鈔』巻二一(大正三六―一六四bc～五a)を踏まえ、『大疏』巻三(続蔵巻一四―一一九左上)と『大疏鈔』巻三下(同―二八〇右上以下)、同じく『略疏』巻上(続蔵巻一五―六一右上下)と『略疏鈔』巻四(同―一三一左下以下)に同様の説が説かれる。因みに、『演義鈔』の説は、『宗鏡録』巻三六(大正四八―六二六b～七a)にも引用される。『大疏』巻上二の「漸修頓悟ノ木を伐るがごとく、都に入るがごとく〉」を『大疏鈔』巻三下(同―二八〇右下～左上)に次のように釈す。以下引用に当って、『略疏鈔』を適宜利用する。「疏に漸修頓悟の下、次の三対の証悟なり。初めに漸修頓悟と言うは、此に二意有り。一は即ち前の解悟の漸修、修極るが故に証す。二は則ち初より便ち漸修。諸の声聞等の如く、四十年前に漸に三乗の教行を修するに因るが故に。霊山会中に『法華経』を聞き、疑網頓に断ち、心安かなること海の如く、成仏を授記せらる。人の木を伐るに、千斧万斧もて漸に斫り、倒るは即ち一樹の頓に倒るノ惑を断ずるに喩うるなり〉が如し。又た辺より遠く京都に来たるに、数月歩歩にて漸に行き、大城門に入るの日に、一時に頓に到るノ理を証るに喩うるなり〉が如し。天台の、数年修練して百日功を加え行を用いるに、忽然として法華三昧旋陀羅尼門を証得し、一切法に於て悉く皆な通達すとは、即ち其の事なり。北宗漸門の教、意見此の如し。然るに多く二乗の境に入るも、円通の証を得ること難きが故に」。

(4) 頓修に因りて……＝頓修漸悟説。『大疏』の「頓修漸悟ノ鏡を磨くがごとく、射を学ぶがごとく〉」を『大疏鈔』巻三下に釈して次のように言う。「疏に頓修漸悟とは、謂く、円教を聞き円法を信ずと雖も、根性遅鈍にして頓悟を得ず。頓悟を得ずと雖も、楽欲し情殷して、深く頓の理を崇い、頓に大心を発し、頓に諸縁を絶し、頓に煩悩を伏し、此に由りて加行し、漸漸に悟を得て、悟れば即ち是れ証なり。唯だ会解するのみにあらず、人の鏡を磨いて一時に遍ねく一面を磨き、終に一分一寸より功を致さざるも、然るに塵埃は則ち微微に尽き〉漸に浄なり〉、明相は漸漸に顕わるノ漸に照すなり〉が如し。又た射を学びて初めは弓矢を把り便ち意を注いで的に在り〉無上菩提心を発すに喩うるなり〉、終に故に親疎節級を作さざるもノ先に十信を発し十住等を択ばず〉、然るに千百日にて億万箭を射て方めて漸漸に親近し、乃至、百発百中なるノ前は已に其の証を断つを喩え、後は唯だ証の成るを喩うるなり〉が如し」。学射の喩説は、元来、『首楞厳三昧経』巻下(大正一五―六三三c)に出づ。また『楞伽師資記』道信章に、『文殊説般若経』その他に依りつつ、同様の比喩が説かれているのをも参照(柳田『初期の禅史Ⅰ』二四一頁)。

(5) 漸修して……＝漸修漸悟説。『大疏』の「漸修漸悟ノ九層の台に登るに、足履漸に高くして、鑑る所は漸に遠きが如し〉」を『大疏鈔』巻三下に釈して次のように言う。「疏に漸修漸悟とは、謂く、本性の円満なるを信じて猶お業惑障覆有るを計るがごとし。故に勤めて鏡の塵を払うがごとく、漸に心性を悟る。注に引く所の喩えの如し。足履とは修行に喩う。鑑る所とは証悟に喩うるなりノ若し下の

頓に煩悩を断つを糸を斬るの喩えに対せば、此は竹を斬るに節節同からざるが如し〉」。ここにいう「勤めて鏡の塵を払うがごとし」とは、『壇経』にある北宗の神秀の偈に基づくもので、『大疏』の「塵を払って浄を看、方便して経に通ずる有り」に対する『大疏鈔』の釈を、すでに一二段の注(4)に紹介してある。なお、九層の台の喩説は、神会の『雑徴義』（楊曾文編校『神会和尚禅話録』八〇頁、中華書局、一九九六年七月）に基づく澄観『演義鈔』巻二一の説により、竹節の喩説も同じく『演義鈔』による。また有人の説は王之渙の「登鸛鵲楼」詩。『文苑英華』巻三一二、『唐詩紀事』巻二六に見ゆ。『全唐詩』では巻二五三。

(6) 皆な証悟を説く＝証悟については、注（2）参照。『大疏』にもここと同じく「並な証悟と為す」とあり、『大疏鈔』巻三下（同―二八〇左上）に「疏に並な証悟と為すとは、総じて上の三対を結ぶなり」と釈す。つまり、漸修頓悟説と頓修漸悟説と漸修漸悟説の三つが、すべて証悟だというのである。

(7) 先ず須らく頓悟……＝頓悟漸修説。解悟については注（2）参照。『大疏』の「頓悟〈日出づるがごとく、孩の生まるがごとく〉漸修〈霧消ゆるがごとく、孩長つがごとく〉、解悟と為す」を、『大疏鈔』巻三下（同）に次のように釈して言う。「疏に頓悟漸修を解悟と為すとは、慧日頓に出づれば〈円明の覚性なり〉、霜露の惑漸に銷ゆるが如し。又た孩子の初めて生まれて六根、四肢、百節の頓に具わり〈性上の恒沙の功徳なり〉、乳哺し飲食して養育するに漸漸に成長し、出身して入仕する〈万行の荘を資け報化円満するなり。二喩を挙ぐるは、断惑と証理の二相の別なり。後も亦た此に例す〉が如し。此の悟は初に在り、故に解悟に属す。悟後の修は、即ち随相と離相と、理事双修〈若し未だ悟らざれば、即ち相に着す〉を具す、故に功行円満し、必ず証悟有らん。即ち後対に属す」。ここで頓悟漸修説が解悟とのみは断定されていないことに注意する必要があろう。なお、頓悟漸修の子供の誕生と成長の喩えは、元来、荷沢神会が『定是非論』で述べたものである。「遠法師問う、此の教門の如きは、豈に是れ仏法に非ざらんや。何故に許さざる。和上答う、皆な頓と漸と同じからざるが為に、所以に許さず。我が六代の大師は、一一に皆な単刀直入して、直に見性を了ると言い、階漸を言わず。夫れ学道は須らく頓に仏性を見て、漸に因縁を修し、是の生を離れずして解脱を得べし。譬如ば其の母の頓に其の子を生み、乳を与えて漸に養育し、其の子の智慧は、自然に増長するがごとし。頓悟して仏性を見るも、亦復た是の如く、智慧は自然に漸漸に増長するなり。所以に許さざるなり」（楊曾文編校本三〇頁）。また、慧日と霜露の喩説は、『観普賢菩薩行法経』（大正九―三九三b）に出づ。

(8) 『華厳経』に……＝四五段の注（13）参照。なお、この『華厳経』の句を含む頓悟漸修説が、『大疏鈔』巻六上（前掲書―三三五左上～三三六右上）にもある。

(9) 彼の経に……＝未検。

(10) 頓悟し頓修すとは……＝頓悟頓修説。『大疏』の「若し頓悟し頓修する〈染綟の糸を斬る〉と云わば、則ち三義に通ず」を、『大疏鈔』巻三下（前掲書―二八〇左下）に次のように釈す。「疏に若云頓悟頓修という下は、三対あり。悟も修も皆な頓なり。但だ或は互いに先後し、或は同時なるを以ての故に、解と証との異りを成す。初めに頓悟頓修を標す。染綟の糸を斬るを以て喩えと為すは、斬は頓悟の如し。煩悩本とより無なるを頓悟するは、即ち名づけて断と為す。一綟の糸の一剣にして頓に断つに勝えざるが故に〈此は是れ荷沢の

挙ぐる所の喩えなり〉。染は頓修の如し。頓に性上の恒沙の功徳に称いて念念無間にて修す。一綟の糸を染むるに千条万条一時に色を成すが如し。故に清涼大師の『心要』に云く、「心心作仏して、一心として仏心に非ざるは無し。処処道成りて、一塵として仏国に非ざるは無し」と。又た『行願品疏』に云く「行ずれば則ち頓に修し、位は因果を分つは、皆な是れ頓修の義なり」と」。荷沢神会の説と注記されているのは、『問答雑徴義』の次の問答をさす。「又た問うて曰く、「衆生の煩悩は、無量無辺なり。諸仏如来、菩薩摩訶薩は歴劫に修行するも、猶お得ること能わず。云何が龍女は刹那に発心して、便ち正覚を成ずるや」。和上言く、「発心に頓漸有り、迷悟に遅疾有り。若し迷えば即ち累劫なるも、悟れば即ち須臾なり。此の義は知り難し、汝が為に先に事喩を作すを以て、後に斯の義を明かさん。或し此に因らば、悟解を得ん。譬如ば一綟の糸の其の数無量なり、若し合して一縄と為し、木上に置かば、利剣も一斬するに、一時に倶に断つがごとし。糸数多きと雖も一剣に勝えず。菩提心を発こすも、亦復た是の如し。若し真正善知識に遇い、巧方便を以て直に真如を示し、金剛慧を用て諸位地の煩悩を断てば、豁然として暁悟し、自ずから法性本来空寂なるを見て、慧利明了にして、通達すること無礙なり。此を証する時は、万縁倶に絶つ。恒沙の妄念は、一時に頓に尽く。無辺の功徳は、応時に等しく備わる。金剛の慧発らば、何ぞ成ぜざらんことを得ん」」（楊曾文編校本―九二頁）。斬糸の喩説は、澄観の『演義鈔』巻二一にも出づ。

(11) 荷沢云く……＝神会の語録に見出せないが、『景徳伝燈録』巻二八の「洛京荷沢神会大師語」（禅文化本五七五頁）に同語がある。

(12) 又た云く……＝同一の文は見あたらないが、頓悟を説いた『問答雑徴義』に次の文がある。「出世の不思議とは、衆生心中に貪愛無明宛然たるを具する者も、但し真正善知識に遇わば、一念相応して、便ち正覚を成ず。豈に是れ出世の不可思議の事ならざらんや。又た経に云く、衆生の見性せば仏道を成じ、龍女須臾に頓に菩提心を発こせば、便ち正覚を成ず、と。又た衆生をして仏の知見に入らしむ、と。若し頓悟を許さざれば、如来は即ち合に偏く五乗を説くべし。今ま既に五乗を説かず、唯だ衆生をして仏知見に入らしむと言う。斯の経義に約せば、只だ頓門のみを顕わす。唯だ一念相応するに在るのみにして、実に更に階漸に由らず。相応の義とは、謂く無念を見る。無念を見る者は、謂く、自性を了る」（楊曾文編校本八〇頁）。

(13) 『金剛三昧経』に……＝無相法品（大正九―三六七a）による。

(14) 『法華』も……＝「法師功徳品」（大正九―四七c）の「父母所生眼、悉見三千界」による。

(15) 牛頭融大師＝一二段の注（6）参照。

(16) 此の門に二意有り＝澄観の『行願品疏』巻二の別本には、二義とするのもあるが、先悟後修、先修後悟、修悟一時の三義とし、宗密も『大疏』巻上二（前掲書―一一九左上）や『略疏』巻上一（前掲書―六一右上）に三義とする。

(17) 悟に因って修……＝前注の三義の第一の先悟後修に当り、『大疏』巻上二（同）の「謂く、先に悟りて〈廓然として頓に了る〉、後に修す〈著せず証せずして曠然として道に合す〉。解悟と為す」を、『大疏鈔』巻三下（前掲書―二八〇左下）に次のように釈す。「疏に謂く、先悟後修等とは、初対なり。注に釈する所の如し。頓に身心の塵境の皆な空なることを了るに由るが故に。諸相に著せず、心性を証せず、心性本とより不動なるが故に。又た頓に恒沙の功徳の皆な備わるを了るに由るが故に。念念之れと相応するを、名づけて道

に合すると為す。悟の先なるに於てに由るが故に解に当るなり」。

(18) 修に因って悟らば……＝三義の第二の先修後悟に当る。『大疏』巻上二(同)の「先に修して〈薬を服す〉、後に悟る〈病は除かる〉。証悟と為す」を、『大疏鈔』巻三下（同）に次のように釈す。「疏に先修後悟等とは、次の対なり。謂く、頓に諸縁等を絶するに由る云云〈上に引く所の如し〉なるが故に。心地の豁開を得る。根欲倶に勝るを以ての故に。前の頓修漸悟と同じからざるなり。注に修を以て薬を服するが如しとは、一服すれば頓に契うなり。悟を病は除かるるが如しとは、熱病の汗を得て、四肢百節一時に軽涼なるなり。漸漸に平復するの意を取らざるなり。悟の修の後に在るを以ての故に証に当るなり。然るに此の証と解とは亦た二相無し」。薬病については、二〇段参照。

因みに三義の第三の修悟一時について、『大疏』巻上二（同）は、「修〈無心にして照を忘ず〉と悟〈任運に寂知なり〉とは、一時なり」といい、『大疏鈔』巻三下はそれを次のように釈す。「疏に修悟一時とは、後の対なり。謂く、無相を修と為し、分明を悟と為すを以て、悟は即ち慧なり、用なり、修は即ち定なり体なり。荷沢云く、体即（そのまま）にして用なり、自ら知る等、と。注の中に取意して、『心要』を引くなり。具さには「無心にして照を忘ずれば則ち万累都て捐（す）て、任運に寂知を以てすれば則ち衆行爰（ここ）に起こる」と云う。今ま但だ各おの上句のみを取るが故に。一は悟に喩え、一は修に喩うるなり。若し全て後の二句を用うれば、自ずから修と悟と有り。謂く、上句は悟なり、下句は修なり。『心要』に又た云く、「一念不生ならば前後際断す〈即ち頓修なり〉、体を照して独立せば、物我皆な如なり〈即ち頓悟なり〉」。荷沢云く、「一切善悪、都て思量せざれ」。言下に自ら念想を絶ち〈修なり〉、正しく念想無ければ心已に自ら知る〈悟なり〉」。

さらに、この修悟一時は「即ち解と証とに通ず」とあるのを、『大疏鈔』に次のように釈す。「疏に即通解証とは、此に二意有り。一は、上に釈して証と解とも亦た二相無しと云うが如し。故に二皆な通ず。謂く、証即（そのまま）が即ち解、解即（そのまま）が証なり。二は、或は是れ証、或は是れ解なり。謂く、頓に了（さと）れば頓に息む等は、即ち解悟と為す。頓に尽きれば頓に覚る、即ち証悟と為す。大夢覚（さ）むるが如し、覚むれば即ち頓に覚す。夢は必ず頓に尽きるが故に〈『仏地論』に説くが如し。下に当に具さに釈すべし〉」。

(19) 法に頓漸無し……＝既に十九段にも説かれるが、頓漸を分類した『大疏鈔』巻三下の九対の中にない説で、禅宗の説を取り入れた、注目すべき説といえよう。敦煌本『六祖壇経』に、「法に頓漸無し、人に利鈍有り。迷えば即ち漸に勧むるも、悟人は頓に修す」（石井修道前掲書、一二三頁。楊曾文校写『敦煌新本六祖壇経』一六頁、上海古籍出版社、一九九三年一〇月）とあり、また、「法は即ち一宗にして、人に南北有り。此に因りて便ち南北を立つるのみ。何ぞ漸頓を以てせんや。法は即ち一種にして、見に遅疾有り。見遅なれば即ち漸、見疾なれば即ち頓なり。法は漸頓無く、人に利鈍有り。故に漸頓と名づく」（同（続）九五頁、楊本四七頁）とある。なお、この説の背景については、小川「神会没後の南北両宗」第二節を参照。『宗学研究』三三、一九九一年。

(20) 『楞伽』の四漸四頓……＝四巻『楞伽経』巻一、一切仏語心品（大正一六―四八五―六a）の説をさす。澄観の『行願品疏』巻二(前掲書二五二左上）や『演義鈔』巻二一（大正三六―一六四b）を直接承けて、宗密も『大疏』巻上二（前掲書一一九左下）に「若し楞

伽の地前〈信・住・行・向なり〉の四漸〈菴羅の熟、陶器の成、大地の生、習芸の就〉と聖位〈初地・八地・報身・法身〉の四頓〈明鏡の物を現ず、日月の色を照らす、蔵識の境を知る、仏光の照曜す〉に約さば、即ち修行は漸と為し、理を証るは頓と名づく」とある。この文を『大疏鈔』巻三下（前掲書二八一右下～左上）に次のように釈す。「疏に若し楞伽に約すの下は、第九対の証悟なり。此に漸頓は各おの四ありとすと雖も、四対に非ざるなり。謂く、地の前の四漸を以て地の上の四頓に対するが故に。彼の経に、大慧、仏に白して言く、「世尊よ。云何が自心の現流を浄除するを、為た頓とし、為た漸とするや」。答中に先に四漸を明かし、後に四頓を説く。漸。経に云く、仏、大慧に告ぐ、「漸浄は頓に非ず。一。菴羅果の漸に熟すは頓に非ざるが如く、如来の漸に衆生の自心の現流を除くも、亦復た是の如し。漸浄は頓に非ず〈一に此は十信を喩う〉。二。陶家の器を作るに漸に成るは頓に非ざるが如し〈十住なり〉。三。大地の漸に生ずるは、頓に非ざるが如し〈十行なり〉。四。習芸の漸に就るは頓に非ざるが如し〈十向なり〉」と。上の四漸は、修行に約して、未だ理を証るにあらざるが故に。下の四頓は、已に理を証るに約するが故に。一。明鏡の頓に現わる喩。経に云く、譬如ば明鏡の頓に一切の無相の色像を現ずるがごとし。如来の一切衆生の自心の現流を浄除すること、亦復た是の如し。頓に無相にして所有あること無く、清浄法界〈初地より七地に至るを喩う〉を現ず。二。日月の頓に照らす喩。云く、月日輪の頓に照らして一切の色像を顕示するが如く、如来の自心の現流する習気・過患の衆生を離れんと為ること、亦復た是の如し。頓に不思議勝智境界〈八地已上を喩う〉を顕示せんが為なり。三。蔵識の頓に知る喩。云く、譬如ば蔵識の頓に分別し、自心所現の身相及び安立受用の境界を知るがごとく、彼の諸仏も亦復た是の如し。頓に衆生所処の境界を熟するに、修行者を以て色究竟天〈此は報身に喩う〉に安処くなり。四。仏光の頓に照らすの喩。云く、譬ば仏の所作の仏光明らかに照曜するに依るがごとく、自覚聖趣も亦復た是の如し。彼の法相に於いて有性無性、悪見妄想、照して除滅せしむ〈亦た法・報に喩う。前は頓成に喩え、此は頓照に喩う〉。今ま注の中は取意にして、撮略して之れを標わす。但だ上に引く経文を看ば、自ら見に当らん」。以下の文は、後注（26）参照。

(21) 先に頓悟し……＝宗密が頓悟漸修説の立場から『円覚経』を重んじて来たことは、従来、多く説かれて来た。『円覚経』の頓漸悟修説および解悟証悟について、『大疏』巻上二に、『楞伽経』の四漸四頓説につづけて次のように述べている。「此の『円覚経』は、前の諸説を備う。謂く、文殊の一章は是れ頓の解悟、普眼の観成は是れ頓の証悟なり。三観の本〈威徳章〉と末〈弁音章〉は是れ漸の証悟なり。普眼の観は、解と証とに通ず。又た三観は一一に首に悟浄円覚を標し、次に行相を明かし、後に成功を顕わす。初中の対を為すは是れ頓悟漸修、中後の対を為すは是れ漸修頓悟なり〈又た普眼の観は、漸修頓悟を示す〉。三期の道場は是れ漸修漸悟、普賢の後段は是れ頓悟頓修なり〈又た清浄慧章は心を忘じて頓に証すること有り〉。更に余の文有るも、繁述する能わず。此等の頓漸は皆な用心を語り、前門と同じからず。但だ是れ教を判ぜば、苟し其の意を得ば、皆な定慧を成ず。如し其れ旨を失わば、妄想を成じて即ち無記に堕す。冀くは諸の学者、審にして之れを修せよ」。この最後の文を『大疏鈔』巻三下（同一二八一左下～二八二右上）は、荷沢神会の三学説と関係させて次のように言う。「皆な定慧を成ずと言うは、謂く、定慧に有作・無作・自性の三種の同じからざること有り。故に頓と漸とに皆な相当するなり。故に荷沢は三種の三学を説く。有作の三とは、諸悪作さざる等に約す云云。無作の三とは、妄心起ら

ざるは是れ戒〈貪・嗔・慳・嫉等無し〉、妄心無きは是れ定〈思・覚等の事無きなり〉、妄心無きを知るは是れ慧なり〈無記空に落ちざるなり〉。自性の三とは、謂く、空・寂・照なり〈次の如く之れを配す。空は是れ四句を離れ百非を絶するの義なり。故に戒に配するなり。余の二は知るべし〉。妄想と言うは、定無きの慧なり。無記と言うは、慧無きの定なり。此に但だ冥冥として揀択する所無きを以て無記と為す。唯だ善悪のみを揀ぶを無記と説くにあらざるなり。審かに之れを修せよと言うは、此の門の意は、行に在りて、知解を図らざるのみ。故に勧めて之れを修せと云い、之れを学べと云わざるなり」。神会の説は、『壇語』（楊曾文編校本六頁）に基づく説と思われる。

(22) 日光……＝日光と孩子の喩説は、既に頓悟漸修説として出されたもので、注（7）を参照。

(23) 猛風……＝『裴休拾遺問』に風と波浪の喩説が、頓悟漸修と関連して述べられる（前掲書―五一・五八頁）。

(24) 明良頓に成じ……＝明良を底本と弘本は訴良に作るも、下記の喩説により明に改む。明良は明徳良知の意である。頓悟漸修の喩説としては、『大疏鈔』巻二上（前掲書―一三三右上）と『略疏鈔』巻三（前掲書―一一三右下）に、「頓に身は是れ良人なると認得し、漸に仁義礼楽を学ぶ」とある。

(25) 高貴の子孫……＝『法華経』信解品（大正九―一六b以下）の長者窮子の話をいう。『本序』の「捨父」を釈して、『大疏鈔』巻一上（前掲書―二一七右上下）に信解品の大意が示される。

(26) 頓漸の義……＝頓漸と円教を説く天台の説は、宗密にとっても重要な課題である。澄観の『演義鈔』巻二一（前掲書―一六四c）を承けて、『楞伽経』の四漸四頓の注(20)につづいて、『大疏鈔』巻三下に次のように言う。「然るに一向に地位を配する者を鑑るに、古今同じく此の釈を為すも亦た経文に順ず。若し清涼大師の『華厳疏鈔』の釈する所に准らば、則ち横と竪とに通じ、則ち位位中に皆な頓の義有り。且く横に約して頓を論ずれば、復た多義有り。謂く、頓悟漸修等の四句云云も亦た上来の九対の頓漸を出でず。別巻に引くが如し。然るに頓と円とは、若し究竟の真実性徳に約せば、出体則ち未円に同じ、名づけて頓と為さざるが故に。若し釈名の義及び教門の施設に約せば則ち別なり。謂く、頓は時に約して竪に説き、円は法に約して横に説く。頓有りて円に非ざるを妨げず。初地の頓に二障分別を断ずるが如く、種子の未だ倶生を断ぜざるが故に。又た円にして頓に非ざるを妨げず。華厳宗の中に顕わす所の一切衆生は全く仏徳を同じくするを信じ、一向に発心して之れを学びて、更に権教・小乗を習わざるが如く、此を円法を聞いて円信を起こすと名づく。然も根性遅鈍にして之れを習うこと多時なるも、漸漸にして方めて解するが故に頓に非ざるなり。天台云く、漸漸は円漸に非ず、円円は漸円に非ず。謂く善く漸家も亦た円漸有り、円家も亦た円漸有り。漸家の漸とは、江の岷山を出ずるに濫觴より始まるが如し。漸家の円とは、大江の千里の如し。円家の漸とは、初めて海に入るに、漸に深しと雖則も、一滴の水の已に大江を過ぎるが如し。況んや濫觴をや。円家の円とは、海の涯底を窮むるが如し。故に今ま漸は是れ円家の漸と云うは、尚お漸家の円を過ぐ。況んや漸家の漸をや。故に五教中に頓教と円教とは同じからざるを判ず。上来多くの段は同じからず。総じて第一に当る。禅宗を叙べ竟る」。

（以下つづきは『論集』第三十号に掲載予定）